Vol. . 263　田舎っぺの経済学　（平成 25 年 9 月 10 日）

アダムスミスから数えて凡そ 200 年余り、水は高い所から低い所へ流れると言う法則に反して世界から孤立して日銀独自の理論のもとに円高を招き、マネーの動きを阻害して株安をつくり、失業や多くの倒産を生み、年間３万人を超える自殺者が続いたのは金融策とは全く無関係とは言えない・・・と浜田宏一教授はその書の冒頭に書き起しております。

リーマンショック後、間髪入れず日本以外のアメリカ、中国、韓国、英国、スイス、スエーデン等世界各国は、最大限の量的金融緩和によって自国通貨を大きく下落させました。大幅にバランスシートを膨らまして貨幣量を大量に増やしたのです。

これによって例えば韓国は 30％通貨の為替レートを下落させたのに反して、日本の通貨は 30％上昇させることとなり、そのハンディは 60％となりました。そのために日本は競争力を失って、エルピーダを始めとして日本の電機産業界に壊滅的な打撃を受けた事は多くの皆さんがご承知の通りであります。

「デフレになりそうな時はお金を市中に沢山供給する量的金融緩和によってデフレから脱出し、過剰なインフレになれば通貨量を減らし、政策金利を上げ金融を引き締めれば良い」と岩田教授の説であります。

アベノミクス（安倍経済学）では、インフレターゲットを 2％としておりますが、経済成長にちょうど良いインフレはそれぞれの国の事情によって異なりますが通常は１～3％、または２～4％と言われております。

私は、現在の日本の中小企業・・・特に地方産業界においては 4％位が欲しいと思っております。私の記憶が正しければ、かつて経済政策通と言われた宮沢さんは、資産価値が暴落した時、早急の最善策が無かったために中小企業は担保能力を失い、泥沼の戦いが続いてきました。2％位のインフレでは、中小企業の借金の返済が出来ないと思っているからであります。（奇しくもＩＭＦも日本のインフレターゲットは 4％が好ましいと発言致しております）

国の莫大な借金が心配されていますが、明治維新以降の日本の借金の歴史を見ると、日清、日露戦争、支那事変、太平洋戦争等の国債（借金）はインフレによってすべて償却（紙切れ同様）になって私の身近では誰一人返してもらった人もなく、不平と言う人も見当たりませんでした。近代の文明社会はインフレによって過去の負債を消してきたのでは？と私は思っております。これからも多分そうなると財務省も思っているのではと思いますが・・・。

それにしても私達経済に係る人達は、消費者であると共に、会社で働く人であり、生産者の一人でもあります。

デフレとは、ユニクロ等の様に外国で作ったものを大手量販店から安いからとどんどん買い続ければ、自分達の会社で自分達が作ったものは外国で作ったら安い物に押されて、価格の値引き競争となり、会社の利益は減り、賃金は下がり、やがて働く場所を失って生活保護者となり、自殺者が３万人を超え続ける現実を、政治、行政、市民が孤立社会、限界集落等の問題を合わせて考えて欲しいものです。

浜田宏一、浜田幸一、音で読めば全く同じ「ハマダコウイチ」です。

２人共、碁が好きで上手だったのでＣＳ放送スカパーが「ハマコー対決」の企画をすすめたが、幸一先生曰く、「碁を楽しむのは良いが、勝ち負けを人様に見せる事もないだろう」との意向で折角の「ハマコー対決」は実現しなかったそうです。

２人共天下のハマコーさんらしい因縁があったものですね・・・

浜田宏一、山本幸三、三橋貴明、高橋洋一、藤原正彦氏著書参照しました。